

実践報告

## プレゼンテーションをするために『おにごっこ』を読む指導

白井 雄大\*

### Instructions on reading “Onigokko” for a presentation

Yudai SHIRAI\*

【要約】本報告は、2年生児童を対象に『おにごっこ（光村図書2年下）』を用いた実践及び分析である。実際に行われている縦割り活動を変えるためにプレゼンを行うという、はっきりした目的意識をもったことで、児童は大事な言葉を探しながら読みフリップにまとめたり、よりよい発表のために根気強く改善しようとしたりした。プレゼンを通して実生活を変えた経験は、児童にとって有意義な学習になった。

【キーワード】おにごっこ プレゼンテーション 言葉の資質・能力 学び方の資質・能力

#### 1 概要

本実践は、白井ら（2020）による、「言葉の資質・能力」と「学び方の資質・能力」を相乗的に育む授業づくりを基盤としている。この研究では、「学びに向かう力、人間性等（以下、学び方の資質・能力）」の視点に重きを置き、学級全員の「言葉の資質・能力」を高める授業づくりを目指してある。

以下に、実践の具体を記す。

##### (1) 単元目標

6年生に遊びをプレゼンするために、大事な言葉に気を付けて本を読み、知りたい情報を得ることができる。

##### (2) 評価規準

ア 情報と情報に共通したり、相違したりしている関係を理解することができる。【知・技】

イ 文章中の重要な言葉や文を考えて、選び出すことができる。【思・判・表】

ウ 6年生に採用してもらうために、プレゼンの準備・練習に根気強く取り組もうとしている。【主】

##### (3) 単元観

本教材『おにごっこ』は、おに役と逃げる役の両方の立場から3種類のおに遊びを紹介している説明的文章である。初めに「遊び方の種類と理由」に関する問いがあり、各段落がその答えとなっている。最後は文章全体を総括し、皆が楽しめるようにおに遊びが工夫されてきたと締められている。本教材は、次の2点から小学2年生にとって価値のある文章だと考える。①各段落が接続語から始まり「遊び方の種類と理由」の順序で説明されていて、構造把握が容易である点。②「おに」「にげる人」といったキーワードがくり返し登場し、それらのキーワードに着目することで自分が知りたい情報を得られる点。

本単元では、「なかよしタイム（本校で行われている異学年交流で遊ぶ時間）」の遊びを6年生にプレゼンテーション（以下、プレゼン）するという言語活動を設定する。フリップに遊びの概要（遊びの名前、遊び方、意図や面白さ）を端的に記し、たてわり班（各班6名程度）内で提案する機会



の遊び係がいるが、週3回、あまり被ることなく遊びを提案している。そのことに触れ、なぜかを問うと、「いろんな遊びをしたいから」と返した。なかよしタイムに対しても同じように新しい遊びを提案しようと、単元目標に話を進めた。

最近まで国語科の学習では、1年生に向けた「おもちゃ作りの説明書」を言語活動に据えて活動してきた。今回は6年生を対象とし、プレゼンを行うことを伝えた。また、プレゼンをしようにも遊びを知らないことから、遊び方がたくさん乗っている本（以下、遊び辞典）を紹介し、「全部を読むことは大変だから、知りたいことだけ読む読み方を身に付けよう」と話し、「大事な言葉に注目して読む」という「言葉の資質・能力」に関わる目標を定めた。これらの本は、図3のように集めて「ミニ図書館」として教室に設置した。

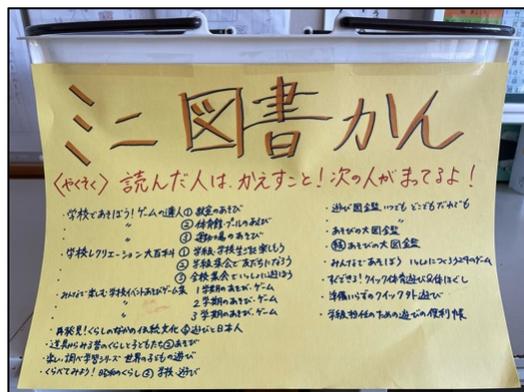


図3 教室に置いていたミニ図書館

さらに、前回の説明書作りでは、出来上がった人はそれで満足し、以降の改善が少なかったことに触れ、「6年生に納得してもらえないと採用されない」ことを伝えた。そこから、「採用してもらうために、(完成してもさらに) よりよくする」という「学び方の資質・能力」に関わる目標を定めた。

ここまでの話を踏まえ、教科書にいくつか遊びが紹介されていることを話し、『おにごっこ』を読む流れとなった。どんな鬼あそびをしたことがあるか口頭で問い、「変わり鬼、増え鬼、色鬼、高鬼」などの反応があり、「皆が知っている鬼遊びは紹介されているかな?」と興味を惹いて読み始めた。読んだ後は、板書のような観点を与え、感想を書かせた。

(2) 2時間目

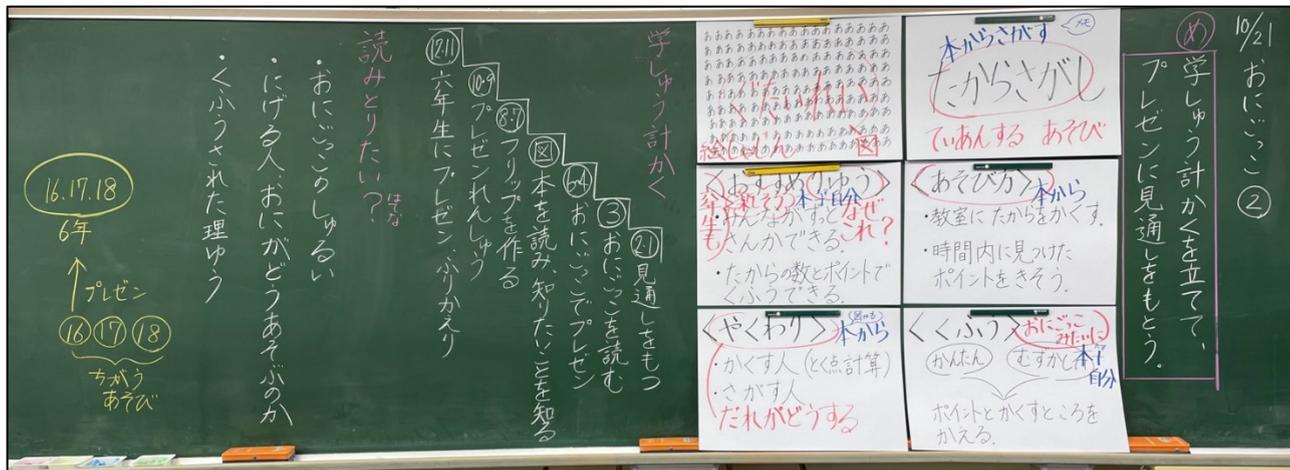


図4 2時間目の板書

テレビ番組から抜粋したプレゼンの様子を見せ、「フリップに書いたもの」に「口頭で付け加え」をしながら説明していることを紹介した。「こんなに話せない」と不安視する声もあったため、単元目標を示し、大事なことは本を読んで情報を集めることであると確認した。その後、児童にとって馴染み深い遊びである「宝探し」を例に、教師がプレゼンモデルを行った。

6年生にプレゼンを行うことが目的、そのために何が必要かを、逆向き設計で考えていった（図4中央部）。教師のプレゼンモデルを基に、フリップにどんなことを書けばよいか問い、出てきた意見を赤で書き加えている。具体例と書いている左上のフリップに関しては、「絵や写真、図を使った



残す「役割」について、「どんな役割がある？」と問うと、「おに、にげる人」という反応があり、そこから、おにとにげる人に線をひくように指示を出した。すると、全部で二十五回も同様の言葉がくり返されていることに児童が気づき、「このようなくり返しのある言葉に注目すると、知りたい情報が得られる」とまとめた。

(4) 4時間目

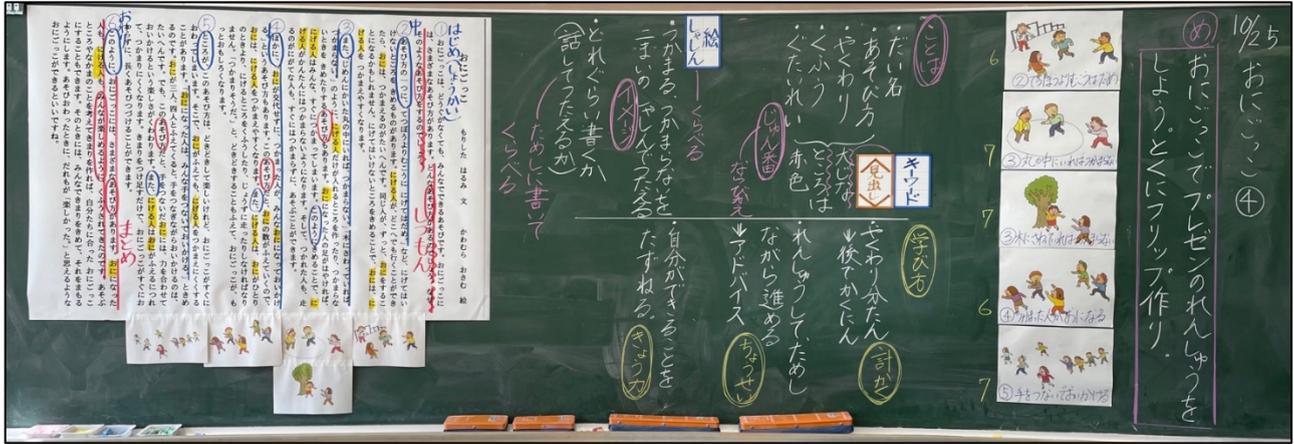


図8 4時間目の板書

前時で、「段落の一文目を読むと遊びの種類が分かる」「キーワードに注目すると役割が分かる」「(中の) 段落を読むと工夫した理由が分かる」という見通しをもてたことを振り返り、本時のめあてを立てた。その後、興味がある遊び（ある程度人数が均等になるように調整）ごとに分かれて、フリップ作りに入った。

ア 【学び方の資質・能力】

児童は、これまでの「学び方」の経験を生かし、役割分担をしたり、途中途中で確認しながら進めたり（図9）、自分にできることをすると申し出たりしていた。ここまでの半年間の「学び方の資質・能力」が生かされている姿を感じる。



図9 確認している様子

イ 【言葉の資質・能力】

また、各フリップに何を書くか、その順序をどうするか、絵や図をどのように入れるか、どれくらいの文字量で書くか等を考えながら進めていた。教師は、それらの姿を価値付けたり、アドバイスをしたりしながら机間指導を行った。皆に紹介したいことは黒板に書き、時にはそれを伝えながら個に応じた指導を行っている。

活動の終盤には、黒板を示しながら、児童のよい姿を紹介し、ぜひ次時に真似してほしいことを伝えた。なお、省略しているが、次時以降も最後に全体共有の時間を設けている。

(5) 5時間目

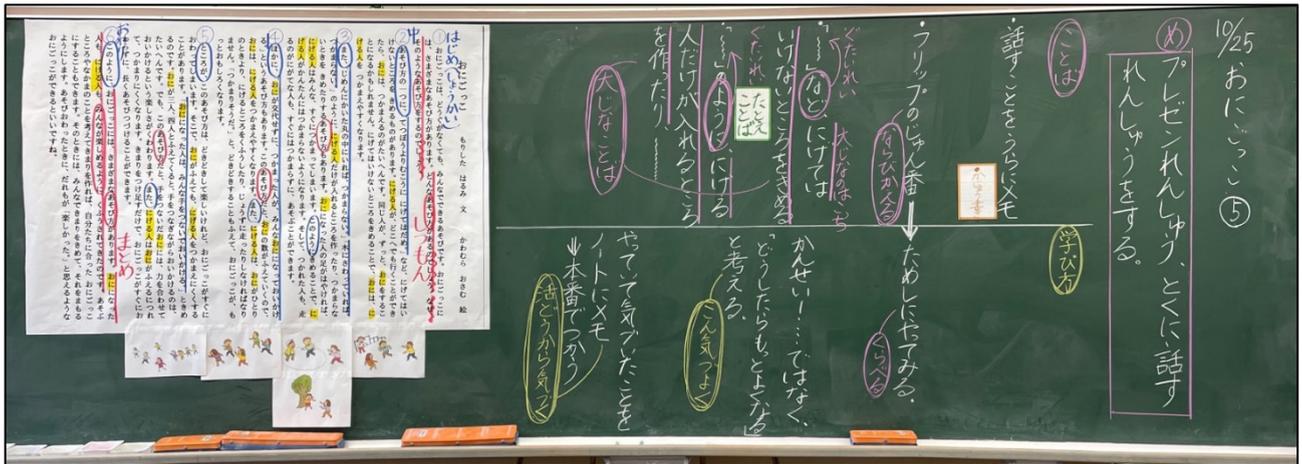


図 10 5時間目の板書

前時で、フリップ作りを行ってきたことを確認し、プレゼンのためには話す練習も必要であることから、本時のめあてを立てた。実際には、フリップが未完成のチームもあり、流動的に話す練習に入るように指示を出した。以降の流れは、基本的に前時と同じである。児童はチームで活動し、教師はそこに指導を行い、全体に共有したいことを板書していった。

ア 【言葉の資質・能力】

本単元は、あくまで「大事な言葉に注目して、知りたい情報を得る」ことが指導事項である。そのため、本文中に書かれてあることがプレゼン（フリップ）に表れていない場合は、そこを問い返して、本文を読み返すように促した。例えば、「～など、にげてはいけないところをきめるものがあります」という文章では、どちらが工夫で、どちらが例かを読み取らせたい。そこで、「絶対に鉄棒じゃないとだめなの？」と問うた。こうした問いを、班の必要感に応じて話して回った。

イ 【学び方の資質・能力】

話す練習に入っても、さらにフリップを改善しようと付け加える姿を価値付けた。根気強さという、本単元のねらいに沿った言葉かけだったが、これは話す練習から遠のいてしまう結果となった。全体共有の際は、両方を高める必要があることを伝えている。一方で、絵の色塗ばかりに終始しているチームもあった。そのチームに対しては、「これはあくまで練習だから、色はなくてもよい。それより、本番で六年生に伝わるようなプレゼンにするためには、今何が必要かな」といった自己調整を促す言葉かけを行った。

(6) 6時間目

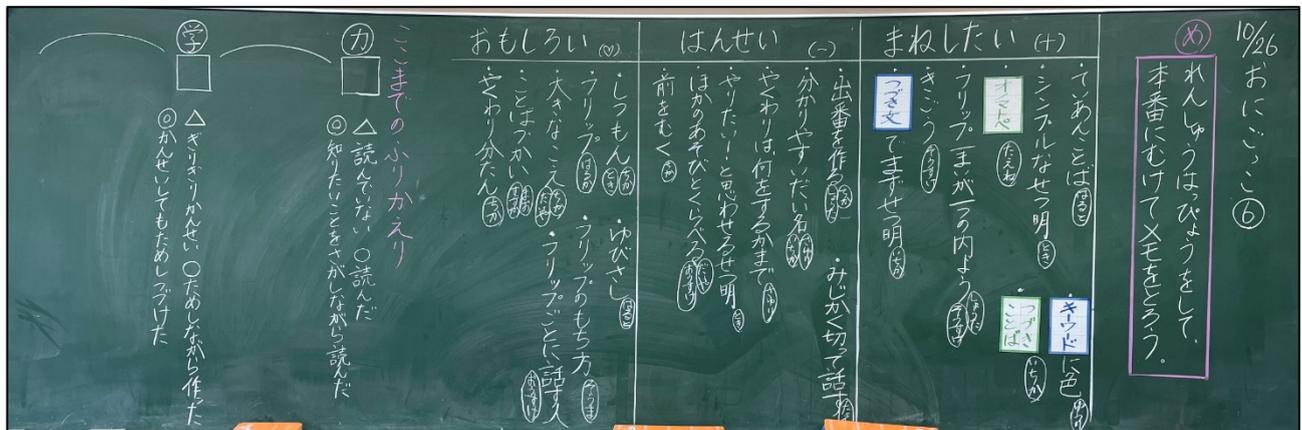


図 11 6時間目の板書



単元が始まってから本時までの一週間の間、遊び事典を並行読書させ、どの遊びでプレゼンをするかまで決めさせていた。選ぶ遊びは児童に任せていたが、「大事な言葉に注目して、知りたい情報を得る」ことができるように、ある程度情報量が多い本の遊びを選ぶように誘導した（ただし、児童の実態に応じて調整している）。

前時で使ったフリップを見せながら、読み取りが必要な情報を確認した。また、「キーワードに焦点化して読む」という見方・考え方の大切さも共有した。

一人一枚のコピーを用意していたため、児童は、そこに色分けした線を引きながら読み進めて行った。これまでの活動同様、たて割り班で集まり、意見交流をしながら読み進めていた（図14）。教師は、これまで同様、全体で共有したい児童の気づきを板書しながら、個に応じた指導を行っていった。以下のア・イは、その例である。



図14 班ごとの活動の様子

#### ア 【言葉の資質・能力】

「遊び方」で悩んでいる児童には、くり返されているキーワードを問い、丸で囲むことで可視化を促した。また、「工夫とその理由」を考えている児童には、普通の遊びと比較するよう促し、何がよくなるか、なかよしタイムの目的と関係しているかを問うた。

#### イ 【学び方の資質・能力】

まだ根気強さ以前の段階である。過去の学習過程を省みて、同様に活動している発言を褒めたり、様々な児童に質問し、他者に倣おうとする姿勢を褒めたりし、価値付けた。

### (8) 8時間目

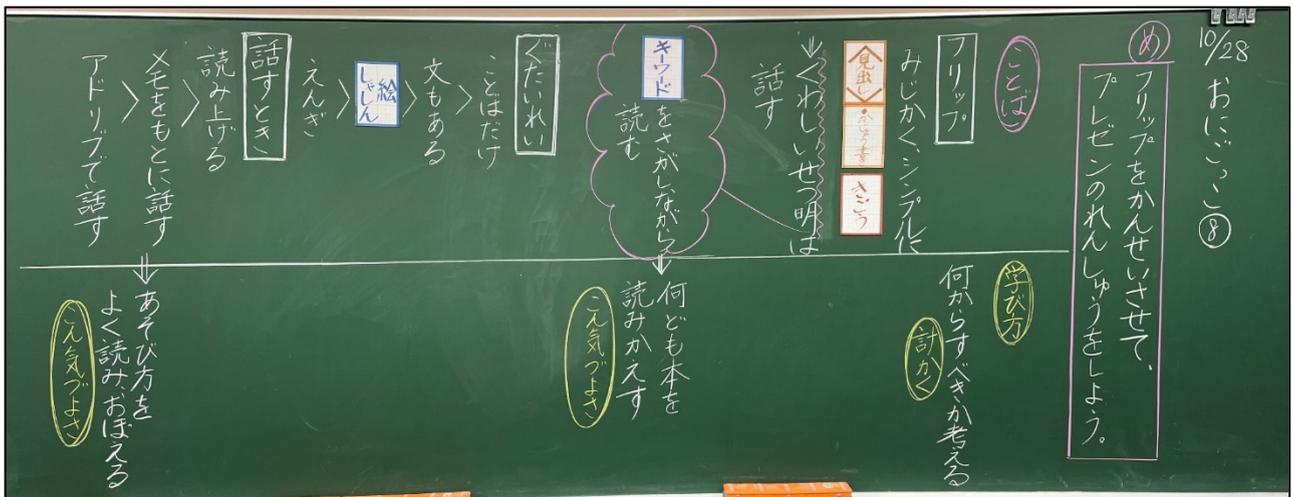


図15 8時間目の板書

前時の続きとして、フリップを作り、完成し次第、話す練習に入ることをめあてとした。前時に引き続き、たて割り班ごとにフリップ作りを行っていった。教師は、これまで同様、全体で共有したい児童の気づきを板書しながら、個に応じた指導を行っていった。以下は、その例である。

ア 【言葉の資質・能力】

児童は、前時に、遊び事典に線をひいている（図16）。机間指導の際は、大事なところを落とさず読んでいるか、それがフリップに表れているかを確認していった。前者に課題がある場合は、くり返されるキーワードを探させたり、見出しに注目したりするように促した。後者に課題がある場合は、線を引いている個所を一緒に読み、そこが伝わらない旨を指摘したりした。

イ 【学び方の資質・能力】

前時で本を読み終えているためか、本時では文をあまり読んでいない児童が多かった。そのため、本を読み返している児童を褒めて価値付けて全体に広めようとした。また、アドリブで図を指し示しながら説明している児童を取り上げ、全員を集めて紹介した。その際、教師が「どうして何も見ずに説明できるの？」と問うと、「よく読んで覚えたから」と答えた。それも全体の前で称賛した。

指導案作成時点では、児童のフリップ作りとその練習を8時間目までに終える予定だった。しかし、教師の想定以上に、児童が遊び事典をじっくり読んだり、下書きをしたうえで丁寧な作成を心掛けたりしていたため、1時間追加の時間を設けている。また、複数の児童が週末に持ち帰り絵を描きたいと申し出たため、それを許可した。

(9) 9時間目

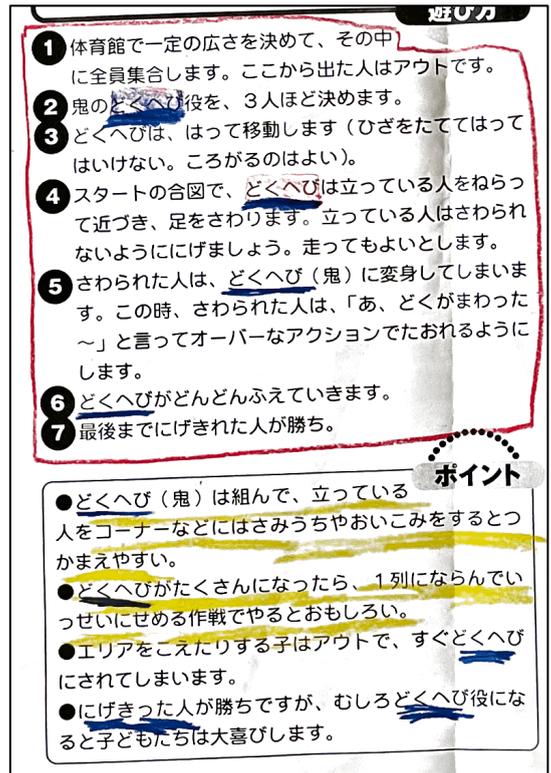


図16 線を引いた遊び事典

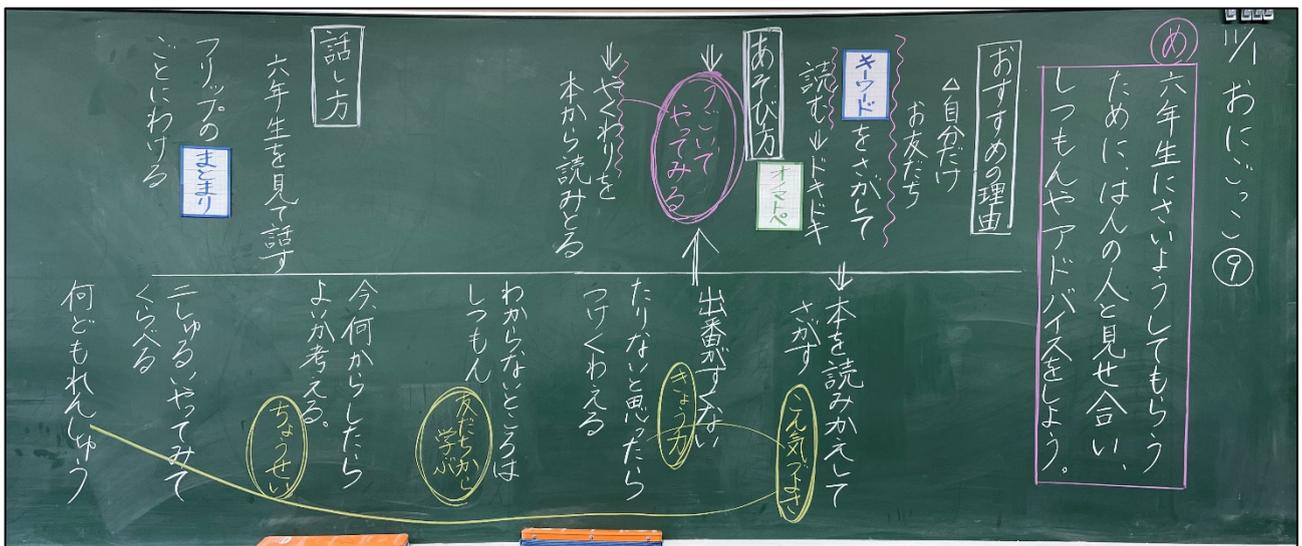


図17 9時間目の板書

いよいよ6年生へのプレゼン直前となる時間である。前時までに完成させたフリップを基に、実際のプレゼンのように練習することをめあてとした。聞き手は質問やアドバイスをしたらよいという児童の発言を受けて、必要ならフリップの内容を加除修正したり、話し方を工夫したりすることを確認した。以下は、個に応じた指導の例である。

ア 【言葉の資質・能力】

特に話すこと・聞くことに関わる指導を多く行った。例えば、身振り手振りを交えて話している班には、「動きがあるんだね、工夫しているね」と聞き手に聞こえる音量でつぶやくことで、聞き手から「動きがあって分かりやすかった」という感想を引き出した。

イ 【学び方の資質・能力】

質問に対して答えられない班があり、その班のある児童が遊び事典を読み返している姿が見られた。この姿は、全体の活動を止めて紹介し、根気強く取り組む姿勢として価値づけた。これにより、遊び事典を読み返してフリップや口頭の説明に付け加える児童の姿が増えていった。

(10) 10 時間目



図 18 10 時間目のプレゼンの様子

10 時間目は、実際に 6 年生にプレゼンをした。図 18 のように、縦割り班ごとにプレゼンし、その後 6 年生から質問や感想を伝える時間とした。事前に 6 年生と打ち合わせをしており、大事な言葉に注目して遊び事典を読みフリップにまとめているため、キーワードを中心に分かりやすくまとめる工夫に言及してもらった。図 19 は、プレゼンを聞きながら 6 年生がとったメモである。

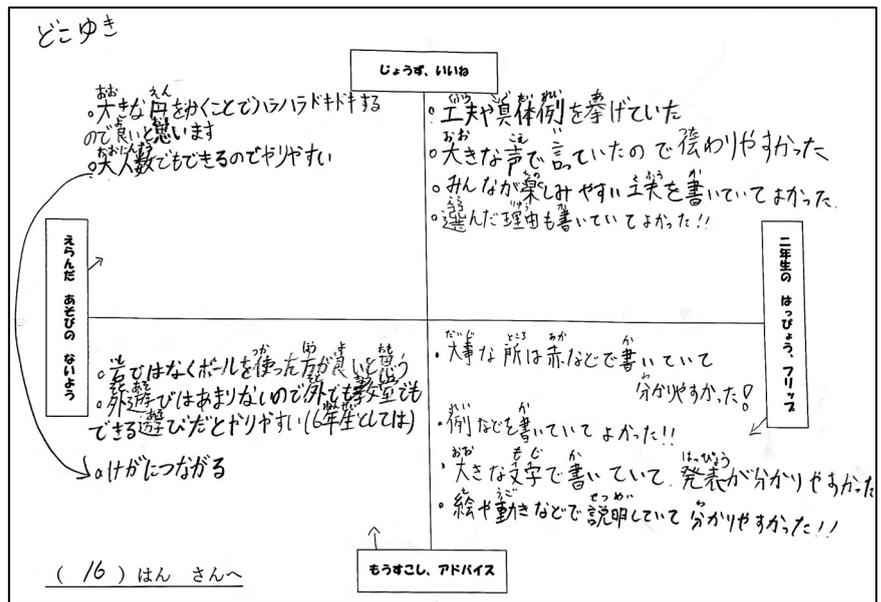


図 19 6 年生からの気付き・感想メモ

児童は恥ずかしがりながらも、これまでの練習の成果を生かしてプレゼンを行うことができた。6 年生の温かい感想を聞き、達成感も得たようである。

プレゼン終了後、教室に戻って単元の振り返りを行った。1 時間目に示した単元目標に沿って、これまでの活動で楽しかったこと、頑張ったこと、これから生かせそうな場面という 3 種類の視点でノートに記述させた。

後日、プレゼンを実際に取り入れた「なかよしタイム」を6年生が行ってくれた。図20は、その日のある児童の日記である。自分たちが授業中に行ったことで、実生活を変えることができた経験は、とても有意義だったようである。

3 まとめ

(1) 成果

- ・ 「言葉の資質・能力」と「学び方の資質・能力」に分けて児童を診断的評価し、単元を通して個に応じた指導を行うことができた。プレゼン作りのために根気強く取り組み、また班で協働的に活動したことで、大事な言葉を探しながら読むという単元目標を達成できた。
- ・ 6年生を対象とした言語活動を設定したことで、その後の「なかよしタイム」に実際に影響を与えることができた。今回の経験により、今後3年生、4年生と成長していくなかで、国語科の学びを実生活・実社会の中で生かしたいという想いをもつことになると考える。

(2) 展望

- ・ 今回の言語活動は、班活動の時間が長かった。そのため、個に応じた指導が行いやすかったと考える。討論など、クラス全体で取り組む言語活動を設定した場合に、どのように個に応じた指導が可能なのか、さらなる実践を重ねたい。

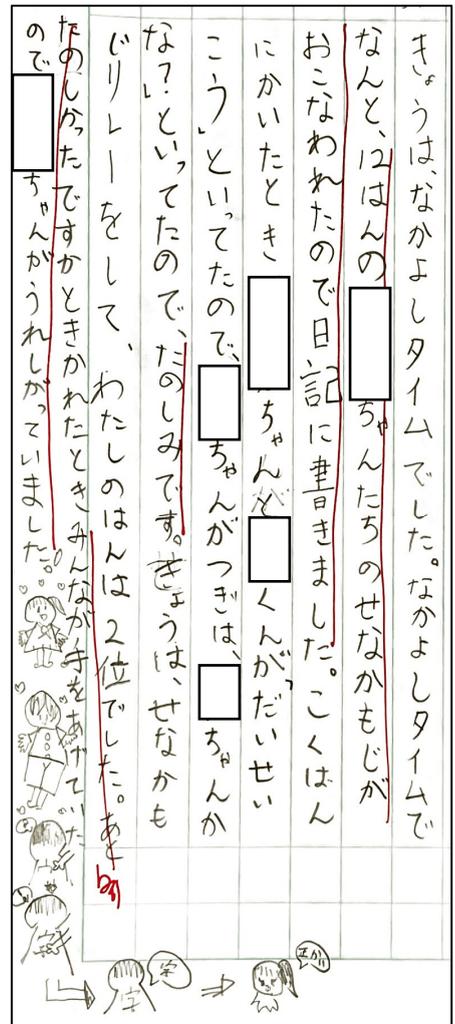


図20 児童の日記

4 文献

白井雄大, 松尾達也, 中尾通孝, 竜田徹 (2020) 『佐賀大学教育学部附属小中学校教育紀要 第5号 (国語科)』